

# ゴンザの『新スラヴ・日本語辞典』にあらわれる 『в нѣ』(vne)という訳語について

いぬかい いて  
pxi13713@nifty.ne.jp

## 【要約】

18世紀に漂流者ゴンザがつくった「新スラヴ・日本語辞典」は、1985年に村山七郎が訳注をくわえて日本で出版された。オリジナルから日本版への転写はほぼ正確におこなわれているが、『в нѣ』(vne)というゴンザの訳語についてはその音価も意味もよくわからなかった。該当するロシア語のみだし語の意味の検討と、ゴンザによる日本語のキリル文字表記の規則の分析からその音価が「フネ」、意味が「船」であることをあきらかにした。

## 0. はじめに

「新スラヴ・日本語辞典」は、ロシアの言語学者アンドレイ・ボグダーノフと、ロシアに漂着した日本語のよみかきのできない日本人の少年ゴンザが1738年に完成させた、世界初の露和辞典である。語数約12,000のすべてがキリル文字でかかれており、当時の薩摩方言を記録した貴重な資料である。

1960年代に「新スラヴ・日本語辞典」を発見した村山七郎が1985年に訳注をくわえて出版した日本版は、薩摩方言の研究者にとってつかいやすい資料になった。日本版は、原本のほぼすべての項目をふくんでおり、つぎの改良がくわえられた。

- 1) ロシア語のみだし語を手がきから活字にした。
- 2) みだし語の日本語訳をつけた。
- 3) ゴンザの訳語を手がきのキリル文字からカタカナの活字にした。
- 4) ゴンザの訳語から現代日本語への橋わたしとなる注をつけた。
- 5) ゴンザの訳語だけをアイウエオ順にならびかえたゴンザ語彙リストを巻末につけた。

本稿では、そのうち『в нѣ』(vne)というゴンザの訳語に関して、2) みだし語の日本語訳、3) ゴンザの訳語のカタカナ転写、4) 注、について検討する。

## 1. 音価が確定できない「в」(v)

「新スラヴ・日本語辞典」のゴンザの訳語の中に、有声子音の前に『в』(v)がつづられていることばが2語ある。村山七郎はその音価が確定できなかったようで、一方を「ヴ」もう一方を「フ」と解釈した上で訳語と注に(?)をつけている。(下線筆者)

みだし語	村山七郎訳	ゴンザ訳	カタカナ転写	村山七郎注
「в л а ю」	「動揺させる、波で運ばせる」	『в н е ф а ш и р ъ』	『フネファシル』	「船走る(?)」
「в л а ю с я」	「動揺する、波で運ばれる」	『н а г а ю р ъ』	『ナガユル』	「流ゆる」
「б у ч і ю」	「鈍い音をだす(?)」	『в н ѣ ф и к』	『フネフィク』	「ヴねひく」
「б у ч и р ъ」	「	『ц ѣ н а』	『ツナ』	「綱」

ゴンザの訳語『Vネフィク』と『Vネファシル』の音価を確定するためには、ゴンザの訳語の意味を確定しなければならず、ゴンザの訳語の意味を確定するためには、このふたつのみだし語「в л а ю」(vlayu)と「б у ч і ю」(buchiyu)の意味を確定しなければならない。

### 1.1 みだし語の「в л а ю」(vlayu) に対するゴンザの訳語の『Vネファシル』

「в л а ю」 「動揺させる、波で運ばせる」 『в н е ф а ш и р ь』 『Vネファシル』 「船走る(?)」  
 「в л а ю с я」 「動揺する、波で運ばれる」 『н а г а ю р ь』 『ナガユル』 「流ゆる」

「в л а ю」(vlayu)は現代ロシア語の辞書にはでていないことばだが、с я動詞(再帰、受身、相互、自動詞化などの意味を付加)とならんでみだし語になっていて、с я動詞の方にゴンザが『ナガユル』(ながれる)という訳語をかいていることから考慮しても、現代ロシア語の「в о л н а」(volna)(波)と同根のことばであることが推測できる。

村山七郎はみだし語の意味から『в н е ф а ш и р ь』(vnefashir')の意味を推測して、「船走る(?)」という注をかいている。『в н е』(vne)の意味は「船」ではないかと推測しているが、ここにはもうひとつ別の問題点がある。

村山七郎が日本版の解説(p.16)でかいているように、ゴンザの日本語のエ列音は、キリル文字で2種類にかき分けられている。もとからエ列音の「エ」(雨、ひげ、胸など)はキリル文字のヤーチとよばれる文字「ѣ」で表記し、アイ→エ、オイ→エのように二重母音起源の「エ」(でく(大工)、て(樋)など)はキリル文字の「е」で表記している。(船)の「ネ」はもとからエ列の音なので「ѣ」で表記するはずで、『Vネフィク』(в н ѣ ф и к)には、「ѣ」をかいている。

『Vネファシル』が(船はしる)ならこれも「ѣ」で表記するはずなのに、『в н е ф а ш и р ь』(vnefashir')と、こっちは「е」で表記している。(船)と解釈するには、語頭の子音『в』(v)と語尾の母音『е』(e)のふたつの問題点があるので、村山七郎は注に「船走る(?)」と(?)をつけたのだろう。

『в н ѣ』(vne)が「船」の意味であるとする、おそらく『в н е』(vne)は(в н ѣ н и)(vneni)(船に)→(в н ѣ -и)(vnei)→(в н е)(vne)と変化した二重母音起源の「е」で、『Vネファシル』は(船がはしる)のではなく(船に(水が)はしる)という意味であるとおもわれる。

ゴンザの『ファシル』は(船が航行する)だけではなく(水がながれる)という意味もある。

現代ロシア語	岩波ロシア語辞典訳	対応するみだし語	ゴンザ訳
течь	流れる、流れ出る	теку	ファシル
перетечь	流れ移る、流れ出る	претекую	ファシリトト

### 1.2 みだし語の「б у ч і ю」(buchiyu) に対するゴンザの訳語の『Vネフィク』

「б у ч і ю」 「鈍い音をだす(?)」 『в н ѣ ф и к』 『Vネフィク』 「ヴねひく」  
 「б у ч и р ь」 「 」 『ц ь н а』 『ツナ』 「綱」

村山七郎訳は「б у ч і ю」(buchiyu)というみだし語が現代ロシア語「б у ч а т ь」(buchati)と同系統のことばだと判断して「鈍い音をだす(?)」とかいたとおもわれる。

岩波ロシア語辞典「б у ч а т ь (蜂が) ぶんぶん」と音を立てる」

村山七郎訳に「鈍い音をだす(?)」と(?)がついているのは、ゴンザの訳語の『в нѣфи к』(vnefik)『в Нефи к』の音価も意味もよくわからず(『в Нефи к』を「ヴ」という「音」(ね)を「ひく」とあてはめたのか)、うまく対応させられないので、みだし語がまったく別の意味をもつ可能性をすてきれなかったからのようである。

### 1.3 みだし語の「бучиръ」(buchir')に対するゴンザの訳語の『ツナ』

『бучиръ』(buchir')については、村山七郎は意味を特定できず、空欄のままにしている。一方、ゴンザは意味がわかったようで『цъна』(ts'na)という訳語を書いている。村山七郎はゴンザ訳の意味はわかったので注に「綱」とかいている。

村山七郎は「綱」というゴンザ訳のヒントをつかってもみだし語の意味を特定できなかった。筆者もロシア語、教会スラヴ語の辞書でさがしても『бучиръ』(buchir')ということばはみつからなかった。

『внефаширъ』(vnefashir')が(ふねにはしる)という意味であるとするれば、『в нѣфи к』(vnefik)も(ふねひく)という意味である可能性はないだろうか。そうであるならみだし語『бучію』(buchiyu)が(ふねひく)という意味の動詞、みだし語『бучиръ』(buchir')が(ふねをひくための)(つな)という、おなじ語根をもつ名詞のペアである可能性がある。

### 1.4 みだし語の「бучиръ」(buchir')の語源

ところで、「新スラヴ・日本語辞典」には、ほかにも村山七郎訳がブランクになっている項目がある。

「топокъ」 「 」 『ашноато』 『アシノアト』 「足の跡」

「топокъ」(topok')ということばがロシア語、教会スラヴ語の中に見つからなかったので、村山七郎訳はブランクになっており、ゴンザはみだし語の意味がわかっただけで『ашноато』(ashnoato)『アシノアト』という訳語をかいている。村山七郎はゴンザ訳の『アシノアト』は「足の跡」という意味であると注にかいている。

『топокъ』(topok')はトルコ語の「topuk」(かかと)ということばからの借用語とおもわれ、ゴンザ訳の『アシノアト』は「足の跡」ではなく「足のかかと」(「アト」は薩摩方言で「かかと」の意味)であることを筆者は過去に推測した(いぬかい 2016)。

「新スラヴ・日本語辞典」にかぎらず、ロシア語にはこれ以外にもトルコ語起源のことばがかなりあるので、『топокъ』(topok')とおなじように『бучиръ』(buchir')もトルコ語からの借用語ではないかとかんがえて、トルコ語の辞書にあたってみたところ、つぎのことばを発見した。

Redhouse Sozlugu 「bucurgat variant of bocurgat.」

「bocurgat capstan, crab.」

「capstan」というのは日本語で「車地」とよばれる、綱をまきあげる装置のことらしい。

日本国語大辞典 「しゃち(車地・車知) 人力により綱を巻き上げる大きな轆轤(ろくろ)。重い物を引っ張ったり、持ち上げたりするのに用いられる。また、和船では車立の車の両端に棒をさし、綱を巻く道具にしたものをいう。大型船では二本の棒を四人で回す。」

『бучиръ』(buchir')はトルコ語の「bucurgat」からの借用語で、綱をまきとる装置のことであるとおもわれる。

### 1.5 みだし語はいずれも「船」関連の意味

『бучиръ』(buchir')は綱をまきとる装置のことで、そうすると『бучию』(buchiyu)は「鈍い音をだす(?)」という意味ではなく、「綱をまきとる」にちかい意味の動詞であるとおもわれる。

綱をまきとる装置のことをゴンザは『ツナ』と訳し、それをつかってまきとることを『フネフィク』と訳したのではないか。ゴンザの訳語も船に関する意味である可能性がたかい。

## 2. ゴンザの訳語のつづり『внѣ』

「船」を意味するゴンザの訳語の『フネ』『フナ』の『フ』の部分のつづりは「新スラヴ・日本語辞典」につぎの形で登場する。

『к о р а б л ь』 「船」                      『ф н ѣ』                      『フネ』                      「船」

『внѣ』(vne)と『фнѣ』(fne)に意味のちがいがみとめられないとすると、つぎに音価のちがいがあつたかどうかをあきらかにしなければならない。

### 2.1 ロシア語の有声子音と無声子音の表記規則

現代ロシア語の表記規則では、有声子音の無声化をつづりに反映させるものと反映させないものがある。

接辞「в о з」(voz)「и з」(iz)「р а з」(raz)が無声子音の前につくと接辞末の「з」(z)は無声化して発音され、それはつづりに反映され、それぞれ「в о с」(vos)「и с」(is)「р а с」(ras)とつづられる。

無声化した有声子音をどうつづるか、スラヴ諸語の中で時代によって地域によってことなり、現代ブルガリア語では接辞「в о з」(voz)「и з」(iz)「р а з」(raz)の無声化はつづりに反映されない。

「新スラヴ・日本語辞典」のみだし語の表記規則は現代ロシア語のように確定されておらず、無声化を反映させたつづりとさせないつづりの両方が混在していて、おおくの重複がみられる(いぬかい 2017)。

『и з т я з у ю』 「尋ね求める」                      『т а н у р ѣ』                      『タヌル』                      「尋ぬる」  
『и с т я з у ю』 「拷問する」                      『т а н у р ѣ』                      『タヌル』                      「尋ぬる」

一方、接辞「в」(v)が無声子音の前につくと無声化して発音されるが、現代ロシア語の表記規則では発音をつづりに反映させてつづりが「ф」(f)にかわることはない。接辞だけでなく無声子音に先行する「в」(v)は無声で発音されるが、つづりが「ф」(f)にかわることはない。つまり現代ロシア語の「в」(v)は環境によって有声でも無声でも発音される。

『в х о ж д у』 「通り入る」                      『т о в о р ѣ』                      『トヲル』                      「通る」  
(語頭の子音は無声で発音されるが、ф х о ж д уというつづりにかわることはない)

### 2.2 『в』(v)とロシア語の表記規則のゴンザの理解

現代ロシア語の教科書によれば『в』(v)は有声子音の前では有声で、無声子音の前では無声で発音されることになっている。『внѣ』(vne)がもし現代ロシア語の単語であつたら無声子音で(fne)と発音することはできず、有声子音で(vne)と発音しなければならない。一方、教会スラヴ語にちかいといわれる現代ブルガリア語では、有

声子音に先行する『в』(v)も無声で発音されることがある(たとえば「в н о с」(vnos)(輸入)は無声で(fnos)と発音される)。

ゴンザのロシア語のリテラシーは日本語のリテラシーよりはるかにたかかったものの、第二言語としてのものであったので、ゴンザが日本語をキリル文字でつづる時の規則を、現代ロシア語のつづりの規則だけから判断するのはむずかしい。ゴンザのおかれた環境で『в н ъ』(vne)のような有声子音の前の『в』(v)の音が規範からはずれて無声子音(f)で発音されることがあったかもしれないし、有声で発音されていてもゴンザには無声子音に聞こえていた可能性もある。

ゴンザが「船」を『ф н ъ』(fne)とも『в н ъ』(vne)ともつづった理由は、日本語とも現代ロシア語ともちがう表記規則をゴンザがもっていたからだろう。

### 3. ゴンザの訳語のつづり『в』

ゴンザが訳語にキリル文字の「в」(v)という文字をつかうのはつぎの音韻である。

#### A. 現代日本語の「ワ」の子音字として、語頭、語中で

「с т у д ъ」	「恥」	『в а р к а к о т ъ』	『ワルカコト』
「п р о с а」	「粟」	『а в а』	『アワ』

#### B. 母音に「ウ」「オ」が後続する時、わたり音として(語頭にはあられない)(助詞の「ヲ」もふくむ)

「р ы б а」	「魚」	『и в о』	『イヲ』
「в а л я ю」	「倒す」	『т а в о с ъ』	『タヲス』
「у д а л я ю с я」	「遠ざかる」	『т о в у н а р ъ』	『トウナル』
「н а з ы в а ю」	「名づける」	『н а в о ю』	『ナヲユ』

#### C. 二重母音起源の「エ」の一部に先行する。

「п л е м я н н и к ъ」	「甥」	『в е』	『ウエ』
「п р и п а х и в а ю」	「少し匂う」	『н и в е с у р ъ』	『ニウエスル』
「п р у т ъ」	「棒」	『з в е』	『ズウエ』

#### D. 合拗音 くわ・ぐわ

「д ы н я」	「メロン」	『с ы к в а』	『スイクワ』
「г е н в а р ь」	「正月」	『ш о г в а ц ъ』	『シヨグワツ』

#### E. 母音に後続する「ウ」

「с н ъ ж у с я」	「雪に遭う」	『ю к і а в ъ』	『ユキアウ』
「и с т р е б л я ю」	「根絶する」	『ц к а в ъ』	『ツカウ』
「в г о н я ю」	「追い込む」	『ω в』	『オウ』

#### F. 無声子音に先行する無声化した「フ」

「б ъ л у г а」	「ちょうざめの種類」	『в к а』	『フカ』
「н а д в о е」	「ふたつに」	『в т а ц у』	『フタツ』
「п р и к р ы в а ю」	「塞ぐ」	『в с а г ъ』	『フサグ』

#### G. 有声子音に先行する、音価が確定できない「в」(v)

「б у ч і ю」	「鈍い音をだす(?)」	『в н ъ ф и к』	『вネフィク』	「ヴねひく」
「в л а ю」	「動揺させる、波で運ばせる」	『в н е ф а ш и р ъ』	『вネファシル』	「船走る(?)」

### 3.1 半母音の表記につかわれる「В」(v)

AからDまでは半母音／わたり音、合拗音の表記に『В』(v)がつかわれている例である。

対格はほとんどがゼロ表示であるが、助詞「ヲ」がつかわれることもあり、その際には『В о』(vo)とつづられる。

### 3.2 音節主音である母音をあらわす「В」(v)

Eは母音に後続する「ウ」をあらわすのにつかわれている。ウ段の母音には「y」(u)という文字がつかわれるが、ロシア語の表記の影響からか、ゴンザは母音連続の表記をさけたいようで、母音に後続する「ウ」には『В』(v)がつかわれることがある。

### 3.3 無声子音に先行する、母音が無声化した「フ」と「ヒ」の表記

現代日本語の「ヒ」にあたる音韻は、母音が無声化していなければゴンザは『ф и』(fi)または『ф i』(fi)または『ф ь』(fi)とつづり、無声化していれば『ф』(f)とつづる。

現代日本語の「フ」にあたる音韻は、母音が無声化していなければゴンザは『ф y』(fu)とつづり、無声化していれば『ф』(f)とつづる。

母音が無声化した「ヒ」も「フ」も『ф』(f)とつづられるので、たとえばつぎのような訳語はその部分だけとりだすと意味の区別ができない。

「в я т ч и н а」	『干し豚』	『ф т а б у т а』	『フタバタ』	乾た豚
「п р а б а б а」	『祖父・祖母の母』	『ф т а б а б а』	『フタババ』	二婆

「干物」の「ヒ」の意味の「フィタ」も「ふたつ」の意味の「フタ」も母音が無声化すると『ф т а』(fta)とつづられるので『ф т а б а б а』(ftababa)が(ほしたおばあさん)でなく(曾祖母)であることは、訳語のつづり以外の部分から判断しなければならない。

### 3.4 無声子音に先行する「ф」(f)と「В」(v)の区別

現代日本語の「フ」にあたる音韻はFのように『В』(v)とつづられることがある。ゴンザが無声子音の前の無声化した「フ」を、『ф』(f)とつづったり『В』(v)とつづったりするのは、ロシア語のつづりの「ф」(f)も「В」(v)も無声子音の前ではどちらも「ф」(f)で発音されるという現象を日本語の表記に流用していたからと推測される。

ゴンザが現代日本語の「フ」にあたる音韻を表記する時に『ф』(f)をつかうか『В』(v)をつかうかの基準はあったらどうか。

「н а ш и в к а」	「縫いつけるもの」	『фше』	『フシエ』	ふせ
「з а п л а т а」	「衣服の繕い」	『вше』	『フシエ』	ふせ
「в е л и к і й」	「偉大な」	『ф т о к а т ь』	『フトカト』	太かト
「к р у п н ы й」	「巨大な」	『в т о к а т ь』	『フトカト』	太かト

おなじことばに『ф』(f)がつかわれたり『В』(v)がつかわれたりしていて、一見かきわけのルールはないようにおもわれる。

一方、「ひと」「ひとつ」「ひかる」など現代日本語の「ヒ」にあたる音韻が『В』(v)とつづられることはなく、かならず『ф』(f)でつづられる。つまり、『ф』(f)は「ヒ」と「フ」を弁別する機能をもたないが、『В』(v)をつかうことで「ヒ」と「フ」を弁別することができる。

### 3.5 有声子音に先行する「ヒ」

有声子音に先行する「ヒ」も母音が無声化することがあり、ゴンザはかならず『ф』(f)でつづる。

「на лѣво」	「左方へ」	『ф д а и с а м е』	『フダイサメ』	左さまに
「м е д л ю」	「のろのろする」	『ф м а т о р ъ』	『フマトル』	暇とる
「б р а д а」	「ひげ」	『ф г ъ』	『フゲ』	ひげ

表1：ゴンザの訳語の「ф」(f)と『в』(v)があらわす音価

	無声性 母音の前	無声性 母音の後	無声性 無声子音の前	無声性 有声子音の前	両唇性
『ф』(f)	+	+	+	+	-/+
『в』(v)	-	-	+	+?	+

### 3.6 有声子音に先行する「フ」

有声子音に先行する「フ」の母音が無声化する例は「船」関連だけであり、ゴンザはGの2語以外は『ф』(f)でつづっている。

「г а в а н ь」	「碇泊所」	『ф н а ч е』	『フナチェ』	船手
「к о р а б ъ л щ и к ъ」	「船乗り」	『ф н а к а т а』	『フナカタ』	船方
「к о р а б л е ц ъ」	「小舟」	『к о ф н ъ』	『コフネ』	小舟
「к о р а б л ь」	「船」	『ф н ъ』	『フネ』	船
「к о р и т о」	「桶」	『м м а н ф н ъ』	『ムマンフネ』	馬のふね
「к о р и (т) ц ъ」	「小桶」	『к о м м а н ф н ъ』	『コムマンフネ』	小馬のふね
「м а т р о з ъ」	「船乗り」	『ф н а к а т а』	『フナカタ』	舟方
「р ы б а к ъ」	「漁師」	『ф н а т о』	『フナト』	ふなと

### 3.7 有声子音に先行する『в』(v)

ゴンザがつぎのふたつの表記規則をもっていたらしいことがわかった。

- ・『в』(v)は、母音に先行しない場合、無声子音としてつづることができる。
- ・『в』(v)は、両唇音の「フ」の表記だけにつかえて、「ヒ」の表記にはつかえない。

この表記規則にしたがえば、「フネ」を『в н ъ』(vne)とつづることはできる。

## 4. 「ф」(f)と『в』(v)の区別に関するゴンザの執筆方針

『в』(v)は両唇音、『ф』(f)は非両唇音、という表記規則をゴンザが徹底するならば、母音が無声化した「ヒ」は『ф』(f)、母音が無声化した「フ」は『в』(v)とつづればよかつたはずである。ところが実際にはゴンザはその表記を徹底させずに、母音が無声化した「フ」は『ф』(f)とつづったり『в』(v)とつづったりしていた。

「船」の表記も『ф н ъ』(fne)と『в н ъ』(vne)の2種類あった。ゴンザの表記規則はどのようにゆれうごいたのだろうか。

### 4.1 日本語のハ行音の表記

キリル文字には日本語のハ行音、英語の「H」をあらわすのに適した子音がない。現代ロシア語では「横浜」が

「Иокогама」(Iokogama)、「ハリーポッター」が「Гарри Поттер」(Garri Potter)とつづられる一方で、「浜松」は「Хамаматсу」(Khamamatsu)、「ジョージハリスン」は「Харрисон」(Kharrison)とつづられる。「富士」は「Фудзи」(Fudzi)とつづられる。

日本語をキリル文字で表記する任務をおったゴンザは、ふつうの日本人なら意識することのない、日本語のハ行音が「ハ・ヘ・ホ」と「ヒ」と「フ」で調音点がことなるということに気づいて、どの子音字をつかうか、いっそうまよっていたかもしれない。

母音が無声化した「ヒ」と「フ」を区別するために「フ」を『В』(v)とつづると、「ツカウ」の「ウ」と「フサグ」の「フ」というあきらかにちがう音をおなじ文字でつづることになる。これはロシア語を表記する時にはゆるされるけれど、日本語もおなじでいいのか、ということをごんざはかんがえたかもしれない。

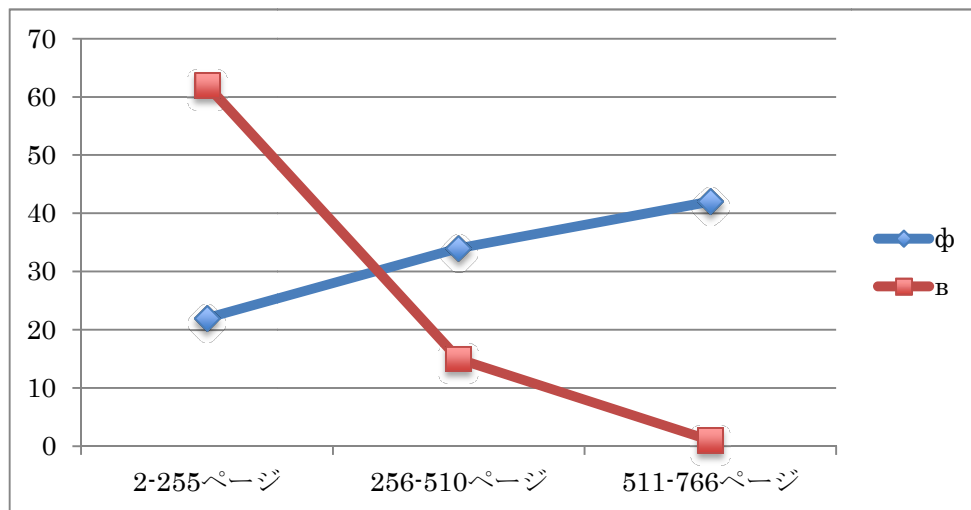
表2：ゴンザの訳語のハ行音の表記

現代日本語	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
有声	ф а	ф и, ф і, ф ь	ф у	ф е, ф ь	Ф о
無声		ф	ф, в		

#### 4.2 表記規則の変化

無声子音に先行する、母音が無声化した「フ」の表記が執筆期間中に変化したかどうか、つまり、辞書の前半と後半でちがいがああるか、しらべてみる必要がある。

ゴンザの辞書の原稿オリジナルコピーは2ページから766ページまでである。これを255ページずつ3つの部分にくぎって、無声子音に先行する、母音が無声化した「フ」をごんざが『ф』(f)とつづっているか『В』(v)とつづっているか、かぞえてみた。



グラフ1：無声子音に先行する母音が無声化した「フ」の表記

255ページまでは1：3のわりあいで『В』(v)がおおく、256ページから510ページまでは2：1のわりあいで『ф』(f)がおおく、511ページ以降では『ф』(f)ばかりで『В』(v)は1例しかみられない(グラフ参照)。ゴンザが『ф』(f)と『В』(v)で非両唇音と両唇音を区別する、という表記規則より、無声子音は『ф』(f)で表記する、という表記規則を重視するようになっていったことが推測できる。



問題の『внѣ』(vne)と『внѣ』(vne)についても、40ページと52ページというはやい段階で出現し、その後は無声子音からはじまる『フネ』を『внѣ』(vne)とはつづらず、すべて『ф』(f)でつづる、という方針にかわっていったとかがえられる。

## 5. 結論

『внѣ фаширъ』『フネファシル』は「船に波がうちよせる」という意味である。

『внѣ фик』『フネフィク』は「まきとり装置をつかって船をひく」という意味である。

村山七郎が音価を確定できなかったゴンザの訳語の『вネ』は、母音が無声化した両唇音の「フ」は『в』(v)、非両唇音の「ヒ」は『ф』(f)でつづることによって区別する、という表記規則でゴンザがかいたもので、音価は『フネ』意味は「船」である。その後ゴンザの表記規則が変化して、『в』(v)は有声音だけにつかわれて、無声子音の「フ」はすべて『ф』(f)とつづることになり、『フネ』は『фнѣ』(fne)とつづられるようになった。

母音が無声化した両唇音の「フ」は『в』(v)でつづる、という表記規則は、ゴンザのほかの著作にはみられないもので、「新スラヴ・日本語辞典」であらたに採用されたが、結局従来の『ф』(f)でつづる表記にもどった。

## 6. おわりに

「新スラヴ・日本語辞典」の執筆方法に関して、もしゴンザの発音をボグダーノフがききとってキリル文字でかいたとすると、母音が無声化した「フ」を表記するのに『ф』(f)をつかわずに『в』(v)をつかってみて、結局『ф』(f)をつかうことにおちつく、という表記規則の変更をボグダーノフが判断したことになる。

しかし、ロシア語本来のことばにはほとんどつかわれず、外来語を表記するのにつかわれる『ф』(f)と、本来有声音用の文字だが無声化した場合にもつかわれる『в』(v)をとりかえてつかってみる、という表記の変更をロシア語のリテラシーがきわめてたかいとおもわれるボグダーノフの意志でおこなったとはかながえにくい。

ゴンザが直接訳語を執筆したとかがえた方が自然である。

## 参考文献

いぬかいいて(2016)「ゴンザの『新スラヴ日本語辞典日本版』(1985)の訳注の問題点」『日本方言研究会第102回研究発表会発表原稿集』, 13-20

いぬかいいて(2017)「ゴンザの『新スラヴ日本語辞典』の重複みだし語について」『日本語教育連絡会議論文集 vol. 29』, 123-140

上村忠昌(2006)『漂流青年ゴンザの著作と言語に関する総合的研究』南日本新聞開発センター

上村忠昌(2016)『鹿児島方言の今昔』南日本新聞開発センター

村山七郎(1965)『漂流民の言語』吉川弘文館

村山七郎(1985)『新スラヴ・日本語辞典』ナウカ